

河野哲也 著

『「こども哲学」で対話力と思考力を育てる』

河出ブックス 2014年 B6判 224頁 ¥1500(税抜)

前田有香

本書は、これまで複数の小中学校で実践を行ってきた著者が、「こども哲学」について理論的観点と実践的観点からまとめたものである。本書は日本において「こども哲学」を理論的に著した最初の書籍といえるだろう。

本書の書評を執筆するにあたり、「こども哲学」とは何かを最初に確認したい。「哲学」という単語には、難解な議論といったイメージがあるが、本書の「哲学」は、難解な文章を講読するような種類のものではないという(p.9)。身近な題材から子どもたち自身でテーマと問題を決め、意見を出し合い、考えを深め合う対話的活動であり、子どもたちと共に哲学の探求がこども哲学である(p.9, 33)。

では、なぜこども哲学の実践が子どもたちにとってよいのだろうか。それは、現代社会において求められている能力が育つためであると考えられる。現代社会で求められる能力は、「人びとと議論して何かを検討していく能力、創造的に問題を解決していく能力、そして誰もが自分は社会の一員だと感じられるような人間関係を作り出す能力」であるという(p.45)。

一方、哲学対話が育てる三つの思考力は、「批判的思考」「創造的思考」「ケア的思考」である(pp.81-91)。対話は、ただの意見交換とは異なるため、相手の意見に対して質問や意見を返すことが必要となる。相手の立場や意見の意図を理解しながら進行しなければ対話にはならない。つまり、対話という活動の中で子どもたちは、単に自分の意見を主張するだけでなく、同時に、協同しながら探求に取り組むという共同作業を行うのである。これらの活動を通して、自分と相手の立場を認めながら、異なった価値観をもつ者同士が共同体として一つの結論を導いていくことを経験していく

のである。現代の教育では批判的思考の重要性はしばしば指摘されるものの、河野は時に冒険的な創造的思考と対象に配慮し大事にするケア的思考も同時に必要であるとし(p.91)、対話によって現代社会に求められる能力が育てられるというのである。

ここで重要となるのが、対話の実践方法である。話す場を設定しただけで河野が挙げた三つの思考力が養われていくわけではない。河野は「セーフティ(安心)」という「誰もが自分の意見をいうことに恐れや躊躇を覚えずにすみ、自分の発言したいことを素直に話すことのできる状態」を、哲学対話でもっとも重視しなければならないとしている(p.97)。自分の意見を発し、さらにみんなと共有するのだという意識をもつことが必要となり、そのためにも、対話の中では「聞くこと」が重要となることも強調している(p.97)。こうした場作りを行うのが教師の務めるファシリテーターの最大の仕事であるという。

本書の第2部は、具体的な実践方法についてまとめられている。著者は最初に「哲学対話に絶対の方法などない」と注意を述べている。本書で紹介された実践例はあくまでも一例としてとらえ、自分自身で最善の方法を探求することを薦めている。しかし、一例とはいえ、場作りに始まり、進行の仕方としてさまざまな対話の形態を紹介し、発言を促すための工夫点なども多数紹介されている。各科目への導入の提案、評価の方法も紹介しており、すぐに実践することのできる内容となっている。

著書が実践編で述べたように、哲学対話の手法に絶対的なものはない。私自身もこれまでに何度も対話の実践に携わってきたが、その時々によって適した手法は異なり、知識があるからといって必ずしも対話がうまく進行するとも限らない。しかし、どの実践においても子どもたちの発言の力を強く感じた。日本国内ではまだ「こども哲学」の認知度が低いが、今後さまざまな場で実践が行われ、反省と改善を繰り返していく中でより良い実践方法が開発され、対話力、思考力を身につけた人びとが社会に増えていくことを期待せずにはいられない。